

Doshisha Spirit Week 2025 Spring オンデマンド講演

真の同志社人―150年の歴史の中で―

同志社大学キリスト教文化センター准教授 李元重

はじめに

キリスト教文化センター准教授、チャプレンの李元重です。わたしは Doshisha Spirit Week を準備する側の一人でもあります。今年は特に同志社創立 150 周年を迎えるにあたり、皆さんにぜひ知っていただきたい人物がいましたので、自ら進んでこの講演を担当させていただくことになりました。キリスト教文化センターが、わたしのお願いを受け入れてくださり、このような貴重な機会を与えてくださったことを、心から感謝いたします。タイトルは「真の同志社人―150年の歴史の中で―」としました。少し申し訳ないほど重く、また、やや生意気で、ある意味では勝手なタイトルかもしれません。

150 年の歴史というのは非常に長く、日本の一つの私立大学として見ても、決して短い歴史です。その中で、多数の卒業生が巣立っていきました。後ほど具体的な数字も紹介したいと思います。そのようなたくさんの卒業生の中で「真の同志社人」とは誰なのか、というのは、あまりにも重いテーマかもしれません。それでも、同志社大学で学んだ者として、また今後も皆さんと共に同志社の歴史について学んでいく者として、あえてこのテーマでお話し、ある一人の人物を紹介したいと思いました。

現在の同志社の規模

同志社は、日本社会、とりわけ京都や関西において、一つの「ブランド」として定着している大学だと思います。言うまでもなく、同志社という名前は多くの人が知っており、一般的に良い評価を受けている大学です。

同志社大学のホームページによりますと、2024 年 5 月現在、創立 150 周年を迎える同志社大学には、28,724 人の学生が在籍しています。学部生が 26,514 人、大学院生が 2,210 人です。

そこで働いている教員は、専任教員が 736 人、また非常勤等さまざまな形で貢献されている嘱託講師の方々が 1,493 人で、合わせて約 2,200 人です。専任職員は 348 人です。卒業生は、2024 年の時点で約 37 万人を数えます。同志社大学の卒業生だけで、地方の中小規模の都市の人口に匹敵します。また、同志社大学は関西にあるものの、全国各地から学生が集まって勉強している大学であることは、言うまでもありません。

有名な同志社人たち

そこで、皆さんが思い浮かべる「有名な同志社人」とは誰でしょうか。まず、一人目として、メイプル超合金のカズレーザーさんを挙げることができると思います。1984 年生まれ、埼玉県出身で、同志社大学商学部の卒業生です。わたしも、彼のネタやコントが好きです。とても面白く、バラエティ番組などを見ていると、知的な能力の高さも伝わってきます。同志社大学の卒業生として誇りを持っているように感じられる有名人の一人です。

次に、井上^{のりゆき}礼之さん。1935 年、京都市生まれ・京都市育ちの方です。同志社中学校・高等学校、同志社大学経済学部を卒業し、1957 年に現在のダイキン工業株式会社の前身となる会社に入社しました。その後、1994 年に代表取締役、つまり社長に就任されました。当時のダイキンは、経営的にかなり厳しい状況にあったそうですが、井上さんの働きによって、ダイキンは日本だけでなく、世界的な空調メーカーとして知られる企業になりました。ダイキンを今のような会社に育てた、能力の優れた経営者であり、同志社が誇るべき人物の一人だと思います。

次に、女性であり政治家でもある土井たか子さんです。1928 年神戸市生まれで、2014 年に生涯を終えられました。土井さんは京都女子大学を卒業しましたが、同志社大学法学部で憲法学を教えていた田畑忍先生の、平和主義と憲法 9 条に関する講義を受け、深く感銘を受けたと言われています。そのことがきっかけとなり、土井さんは同志社大学法学部に編入し、法学研究科修士課程まで修了しました。その後、同志社大学や関西学院大学など、いくつかの大学で憲法学を教えました。

1965 年からは KBS 京都で放送の仕事にも関わり、その時代や社会問題、女性の権利や女性運動などについて語るゲストとしても活動しました。やがて政治の世界に入り、1969 年に初めて衆議院議員に当選します。その後、長く衆議院議員を務め、1993 年には日本で初めての女性衆議院議長にもなりました。今は 1993 年からすでに 30 年以上が経ち、日本社会の中で男女間の差別は少なくなってきたと言われているものの、政治や経済界など、多くの分野において、女性リーダーの数は、OECD 諸国の中でも、まだ決して多いとは言えません。その中で、30 年以上前に、日本で初めて女性として衆議院議長になった土井さんの歩みは、ある意味では「遅い出発」だったかもしれませんが、それ以降もなかなか続く例が出ていないという事実を考えると、非常に画期的な出来事でした。

また、土井さんは社会民主党の党首も務めました。同志社に学んだ一人として、このような輝かしい活動をされたことは、同志社が誇るべきことであり、わたしたちが覚えておくべき人物だと思います。

もう一人、平尾誠二さんという方がいます。韓国人の私が2008年に日本に来て、いろいろなことを学び、慣れていく中で、日本ではラグビーがとても人気のあるスポーツであることを知りました。韓国にもラグビーはありますが、正直それほど人気が高いとは言えませんし、わたし自身も、あまり関心を持っていませんでした。しかし、日本に来て、さらに同志社に関わるようになると、「同志社と言えばラグビーやアメフト」という話をよく聞くようになりました。知らないうちに、平尾誠二という名前をあちこちで耳にするようになったのです。体育関係の話が出たり、ラグビーワールドカップが日本で開催されたときにも、「李先生、平尾誠二という人を知っていますか？」と何度も聞かれました。最初は「知りません」と答えていましたが、何度も名前を聞くうちに、本当に日本で有名なラグビー選手であり、日本代表の監督も務めた人だということを知りました。

彼は19歳のとき、1982年に日本代表に選ばれ、当時の最年少代表選手でした。また、同志社大学在学中に、大学ラグビー選手権で史上初の三連覇を達成しました。まさに同志社ラグビーの最盛期と言える時代を担った人物で、「ミスター・ラグビー」とも呼ばれた方です。

「真の同志社人」の基準

このように、37万人の卒業生の中には、有名人もいれば、名前は知られていなくても、それぞれの分野で大きく貢献している人がたくさんいます。同志社系列諸学校を含めると、その数はさらに増えます。中には、同志社の出身者としてノーベル賞級の業績を挙げた人もいられるかもしれません。数え上げればきりがありません。

ここでわたしが皆さんに問いかけたいのは、「何をもって真の同志社人と言えるのか」ということです。先ほど紹介したような人たちも、もちろん真の同志社人と呼んで差し支えないでしょうし、基準によっては、もっとふさわしい人がいるかもしれません。

しかし、わたしは「真の同志社人」の基準を、やはりこの学校の創立者である新島襄の建学理念・教育思想に忠実であった人、と考えたいと思います。

もちろん、先ほど挙げた方々が新島の理念に当てはまらない、という意味ではありません。むしろ、新島の建学の精神そのものを、現代的に解釈し、自分の時代・状況の中で体現した人を、「真の同志社人」と呼びたい、ということです。

そのうえで、わたしは新島の教育理念を、次の三つの観点から整理したいと思います。

1. ひと一人を大切にすること
2. 自由教育

3. キリスト教主義（キリスト教精神）
4. 新島精神の主体的な解釈と実践

皆さんも入学式などで聞いたことがあると思いますが、「同志社大学設立の旨意」（抜粋）の中に、「基督教主義を以て徳育の基本と為せり」という有名な一節があります。わたし自身、同志社で学び始めたのは 35 歳のときで、神学研究科の大学院生として入学しました。大学院生はあまり入学式に出ない方も多いと思いますが、せっかく日本に留学し、しかもキリスト教主義の大学で学ぶことになったので、期待を持って入学式に参加しました。式典は基督教の礼拝式で、聖書朗読と祈りがあり、とても感動的でした。その中で、「同志社大学設立の旨意」が古い言葉のまま朗読され、当時、日本語を学んでまだ 2 年ほどだったわたしには、内容がよくわからず、とても戸惑った記憶があります。

しかし、その後学びを重ねる中で、この一節が非常に重要な意味を持っていることを理解し、今では学生にも機会があるたびに紹介しています。つまり、同志社の精神を語るとき、「キリスト教主義」、「キリスト教精神」は欠かせない要素であり、ある意味で、どの大学でも共有しうる「知識」だけでなく、「心の教育」「人格教育」、すなわち「徳育」の部分において、キリスト教精神こそが同志社らしさの根幹にある、ということです。

新島が理想とした教育は、上から与えられたものをただ暗記し、再現するだけでなく、主体的に解釈し、自分の時代・状況において実践することでした。その意味で、ここから先は「李元重による真の同志社人の定義」という、あくまで一つの提案です。わたしが「この人こそ真の同志社人だ」と言ったとしても、学生の皆さんの中には「いや、私はこう考える」と違う意見があるでしょう。その違いこそ大切ですし、根拠を持って自分の考えを語ること、それ自体が自由教育の実践だと思います。

それでは、先ほどの内容の 4 番の「新島精神の主体的な解釈と実践」は、そのまま受け入れていただけることを前提にして、1 番から 3 番についてもう少し説明します。

ひと一人を大切にする

「ひと一人を大切にする」ということは、わたしが新島を学ぶ際、最も大切にしたいポイントですし、同時に同志社で働く者として、わたし自身がいつも心に留めておきたいことでもあります。しかし、これは、同時に最も難しいことでもあります。これは、新島が残した、原文では「諸君ヨ一人一人ハ大切ナリ、一人ハ大切ナリ」と記された言葉です。言葉というものは、それがどのような状況・文脈で語られたのかが、その理解においてとても重要で、この言葉も、ある具体的な場面で語られました。

それは、同志社創立 10 周年記念の演説でのことです。1885 年 12 月 18 日、同志社にとっても、新島自身にとっても非常に忙しい一日でした。その前年（1884 年）、新島は大学運営や伝道活動による疲労の回復のため、約 1 年間、ヨーロッパとアメリカを旅しました。まずヨーロッパを巡ってから、ほぼ 10 年ぶりにアメリカに戻り、自分を支えてくれたハーディー夫妻や友人たちに再会してから日本に帰国した直後の時期でした。

その日には、同志社 10 周年記念会、新島の帰国歓迎会、図書館（書籍館）の定礎式など、いくつもの行事が重なっていました。西洋の学問を教える学校として、日本の近代化の象徴の一つでもある同志社の 10 周年は、当時の日本社会においても非常に記念すべきイベントだったのです。京都府知事をはじめ、多くの名士が集まっていました。その場で新島が語ったのが、「諸君よ、ひと一人は大切なり」という言葉でした。

背景には、新島が不在の間に退学処分を受けた 7 人の学生がいたという出来事があります。新島は、その一人の学生のことを思い浮かべながら、「諸君よ、ひと一人は大切なり」と涙ながらに語りました。偉い人—例えば京都府知事や国会議員のような人、お金持ちなど—は、誰かによって大切にされます。しかし新島が強調したのは、そのような人ではなく、自分がいない間に退学処分となり、自分の手が届かなくなってしまった、一人の学生の存在でした。

社会の中で弱い立場に置かれ、取り残された人、その一人が大切だ、と。新島は、そういう人に心を向けていました。ここには、新島の人格主義、学生への深い愛情がよく表れていますが、その背後には、新約聖書ルカによる福音書 15 章 1～7 節の「迷い出た一匹の羊」のたとえがある、とされています。100 匹の羊のうち 1 匹がいなくなったとき、羊飼いは「1 匹くらいならいいか」とあきらめるのではなく、残りの 99 匹を野原に残してでも、迷い出た 1 匹を探しに行く—その 1 匹を見つけたとき、大喜びで連れ帰る—というたとえ話です。

失われた 1 匹、つまり失われた人、その一人を大切にする。新島は、この聖書のたとえに重ねながら、「ひと一人は大切なり」と語りました。これは非常にキリスト教的な倫理観、隣人愛の理解です。しかも、新島はそれを建前や形式として語ったのではなく、心からそう信じ、実践しようとした人でした。だからこそ、今もなお、その言葉はわたしたちに強く響いてくるのだと思います。

自由教育

次に、「自由教育」です。新島がしばしば口にすると伝えられているのが、「自由教育・自治教会・両者併行・邦家万歳^{りょうしやへいこう ほうかばんざい}」という言葉です。すなわち、新島にとって大切だったのは、個人の自由を大切にする教育（自由教育）、誰かに支配されるのではなく、自ら立ち、自ら

伝道し、自ら治める教会（自治教会）、この両方が並び立つときに、社会は健全に発展していく、という考え方でした。

ここでは大学の話ですので、教会のことは脇に置き、特に自由教育に焦点を当てたいと思います。新島が遺言で残した言葉の中に、「^{てきとうふき}倜儻不羈」という表現があります。一般的な基準や、社会的な規律によって「扱いにくい」「統制しにくい」とされるような学生であっても、その個性や可能性を抑圧するのではなく、それを生かす方向で教育すべきだ、という意味です。ここから、自由教育を次のように理解することができでしょう。「どんな個人であっても、その可能性を十分に発揮できるように、その人の自由を大切にし、その自由を生かす教育」。

わたしたちは、さまざまな状況で人間の自由が抑圧される経験をします。自由を抑圧するのは何でしょうか。それは、無知であったり、他者や自分自身への偏見であったり、国家権力や組織内の力関係、いわゆる「パワハラ」のような構造であったりします。また、貧困も大きな要因です。さらに暴力も、人間の自由を深く傷つけるものです。では、自分がある程度のお金を持ち、知識を持ち、社会的な地位や権力を持っていて「自分は自由だ」と感じているだけで、その自由を「本当の自由」と言えるでしょうか。

新島が理想とする自由とは、おそらく権力、財力など何かを「持てる者だけの自由」ではありません。最も弱い人が自由を享受できるときにこそ、本当の自由が実現していると言えるでしょう。わたしたちが自由を語るとき、自分の自由だけで満足してしまうなら、それは「不十分な自由」だと思います。弱い立場の人、貧しい人、身体や心の不自由を抱える人が自由に活動し、成長できること—その自由が守られてこそ、本当の自由です。自分の自由を大切にするだけでなく、相手の自由も大切にする。そのところまで行かなければ、「真の自由」とは言えないのではないのでしょうか。

キリスト教主義（キリスト教精神）

三つ目は、キリスト教精神です。「キリスト教」と言うと、「宗教としての信仰」を連想する方が多いと思いますが、ここで強調したいのは、必ずしも「キリスト教の信徒であるかどうか」という意味ではありません。新島が語ったキリスト教は、信仰そのものだけでなく、キリスト教的な理念・理想を含みます。

新島が仙台で同志社の分校のような働きを始めようとしたとき、仙台教会で説教をしました。その中で、彼はこう語っています。「『耶蘇教は何ぞ』と人、問われたれば、答えて曰わん、『愛^{もって}以てこれを貫く』」（『新島襄教育宗教論集同志社編』岩波書店 2010年 177頁）。

とてもカッコいい言葉ですが、ここでいう「愛」とは何でしょうか。新島がここで語っている

のは、間違いなく「キリスト教の愛」です。

ギリシア語には、愛を表す言葉がいくつかあります。

- ・エロス (*érōs*) : ロマンチックな愛、性的な愛
- ・フィリア (*philia*) : 友情、何かを好む心。フィロソフィー (知を愛する)、フィルハーモニー (調和を愛する) などに使われます。
- ・ストルゲー (*storgē*) : 家族的な愛情
- ・アガペ (*agápē*) : 無条件的愛、無償の愛

アガペは、しばしば「無条件の愛」と説明されます。もう少し単純に言えば、エロスが「愛らしいもの、魅力的なものを愛すること」だとすると、アガペは「愛らしくないものを愛すること」とも言えます。醜いもの、汚いもの、軽んじられているもの、弱いもの、魅力的とは見なされないもの—そうした存在をなお愛し、大切にすることです。

キリスト教の神の愛とは、まさにそのような愛です。自分に逆らう者、自分を攻撃する者、自分と対立する者をも愛する—聖書の言葉で言えば、「罪人」と呼ばれる人々をも愛する神の愛が、アガペです。

キリスト教の倫理は、そのアガペの愛を、人間も実践するよう促しています。自分を愛してくれる人だけを愛するのではなく、自分に関心がない人、時には自分と対立する人すらも大切にすること。それが、キリスト教的な愛です。

ここで、少し日本語の話もしたいと思います。かつて「愛」という言葉は、仏教的な「愛欲」のイメージが強く、あまり高尚な響きのする言葉ではありませんでした。そのため、16 世紀以降、日本にきたカトリック宣教師たちは、アガペを「愛」と訳すことに抵抗を感じ、「お大切」という日本語を用いました。つまり、アガペを「大切にすること」と訳したわけです。感情としての「好き」という気持ちがなくても、人間は相手を「大切にすること」ができます。そこに、アガペの実践の可能性があります。

その意味で、新島の「キリスト教とは何か。愛をもってこれを貫く」という言葉は、「自分を大切にしてくれない人であっても、その人を大切に続けること」とも言い換えることができます。どのような場面でも、どのような人に対しても、その「大切にする心」を貫き通すことが、キリスト教だ、という宣言でもあります。これは、当時だけでなく、現代においても、キリスト教の愛の本質をよく表している言葉だと思います。

真の同志社人の姿

ここまで、「ひと一人を大切にすること」「自由教育」「愛をもってこれを貫くキリスト教精神」という観点から、新島襄の教育思想・建学理念を見てきました。これらを総合すると、わたしは「真の同志社人」の姿を、次のようにまとめることができると思います。

真の同志社人とは、弱い人を人格的に大切にし、弱い人々の自由と権利を保障するために働き、そのような社会的条件を整えることを自らの使命として自覚し、民主主義・正義・公平・公正の確立のために尽力する人であるということです。

力のある人、お金持ち、権力者の自由や権利を守ることは、それほど難しいことはありません。多くの場合、そうした人々の利益は自然に守られます。しかし、同志社に学ぶ者が特に意識しなければならないのは、社会の中で弱い立場に置かれやすい人たち、貧困の中にある人、差別を受けやすい人、自分の声を上げにくい人の側に立ち、その自由と権利が守られるように働くことです。これは非常に理想的であり、同時に壊れやすく、脆い理想でもあります。しかし、その理想を、それぞれの時代と状況の中で主体的に生かしていこうとするところにこそ、「真の同志社人」の歩みがあるのだと思います。

このような視点に立って、わたしが皆さんに紹介したい「真の同志社人」が、柏木義^ぎ円^{えん}という人物です。

柏木義円と同志社との出会い

柏木義円がどのようにして、キリスト教、同志社、それから新島襄と出会ったのかを簡単にまとめてみましょう。彼は 1869 年、越後国（現在の新潟県）三島郡与板に生まれました。浄土真宗西光寺の住職の父徳円と、母・ヤウの長男として生まれましたが、残念ながら父は義円が生まれて間もなく亡くなりました。その後、義円は母ひとりに育てられましたが、この母はとても信仰心に厚く、義円の人格形成に大きな良い影響を与えた女性でした。

義円は一生懸命勉強し、新潟師範学校に入学します。しかし、新潟師範学校が東京師範学校に統合されることになり、義円は上京して東京師範学校を卒業しました。師範学校というのは、今で言えば大学の教育学部のようなところですが、当時は、明治期の「教育令」など新しい教育制度に基づき、日本全国の小学校に教員を送り出すための中核的な役割を担っていました。学費が比較的安い代わりに、卒業後は一定年数、教員として勤務する義務がありました。そのため、経済的に恵まれていないが勉強熱心な若者が多く学んでいました。

義円の家庭も、寺が火災に遭うなどして決して豊かではありませんでした。苦勞しながら東京師範学校を卒業します。その後、群馬県の小学校に赴任し、教諭として働くことになりましたが、教員の数が多かった当時、田舎の地域では、しっかりとした教育を受けた人がす

ぐに重責を担うことも多く、義円も赴任して 1 年ほどで校長に就任しました。

新島襄が日本に戻ったのは 1874 年、その 1 年後に同志社英学校が設立されました。新島は 1874 年に帰国した直後、群馬県の安中に行き、そこで伝道活動を行いました。安中地域の住民たちに向けて、新島は熱心に基督教の話を語り、多くの人が感動し、心を動かされました。そうした人々の中で進歩的な地域の人びとは、安中での基督教教会設立を希望していました。しかし、新島は京都におり、安中は今でも新幹線と在来線を乗り継いで 4 時間もかかる距離です。当時はなおさら、簡単に行き来できる距離ではありませんでした。

そこで、同志社の卒業生である海老名弾正^{だんじょう}が安中に派遣され、伝道活動を行います。その働きによって、キリスト者になろうとする人々が生まれ、やがて新島が再び安中を訪れ、30 名に洗礼を受け、安中教会が創立されました。これが 1878 年、ちょうど柏木義円が群馬に赴任した頃の出来事です。

安中教会は、宣教師の力によらず、日本人自身の力によって創立された教会であり、財政的な支援を外部から受けるのではなく、自分たちで献金を集めて維持していた自給教会でした。当時、教会そのものがまだ少なかった中で、きわめて貴重で、先駆的な教会の一つでした。

海老名弾正は、伝道活動の一環として、神道・仏教・基督教の人たちが一緒に議論する「合同演説会」を開きました。お寺の出身であり、学ぶことに熱意を持っていた柏木も、この会に参加します。そこで海老名弾正と出会い、基督教に強く惹かれるようになります。

その後、海老名と語り合う中で、海老名は柏木に新島襄と同志社を勧めたのです。この勧めを受けて、「同志社で学びたい。新島から学びたい」との気持ちが生じて、新島と柏木の最初の出会いのきっかけになりました。

柏木はその後、同志社英学校に入学し、新島に出会い、そこから学んだことを大切にしました。しかし彼は、経済的な理由から一度は中退し、安中に戻って小学校教員として働きながら、安中教会に通い続けます。やがて、基督教を自らの信仰として受け入れる決心をし、海老名弾正に受洗を申し出て、1884 年 1 月に洗礼を受けました。その後、再び同志社に戻り、神学ではなく普通学科に再入学し、学問を修めました。1889 年に卒業し、すでに師範学校出身でもあったことから、同志社予備校の主任として教員を務めます。この時、彼の影響を強く受けた人物に、山室軍平（日本救世軍の初代指導者）や、山川均^{ひとし}（日本の社会主義者・哲学者）がいます。彼らもまた、柏木を通して同志社と深いつながりを持つことになります。

1892 年、柏木は平瀬かや子と結婚し、生涯に 7 男 2 女、合計 9 人の子どもを授かりました。同志社で学んだ後、熊本英学校に招かれ、そこで教えるようになります。

国家主義の時代と「教育と宗教」の対立

この頃の日本は、1889年に「大日本帝国憲法」が發布され、「皇室典範」や「教育ニ関スル勅語」が制定・公布され、国会も開設されていく、国家主義の時代に入っていました。この流れの中で、象徴的な出来事として知られているのが、いわゆる「内村鑑三不敬事件」です。

東京第一中学校（のちの第一高等学校）で教鞭をとっていた内村鑑三が、天皇の署名の入った教育勅語への「最敬礼」が不十分であったとされた事件です。1891年1月の出来事で、そこから「教育と宗教の衝突」という形で大きな論争に発展しました。

ここでいう「教育」とは、天皇を中心とする国家主義的な教育のことです。そして「宗教」とは、主にキリスト教を指していました。「なぜ内村は天皇に対して不敬な態度をとったのか。それは彼の信仰に原因がある。彼はキリスト教徒であり、その理想・理念は日本の国家主義と相容れないのだ」というような議論を主導したのが、哲学者・井上哲次郎でした。

後に明らかになりますが、柏木義円は、この井上の論を徹底的に批判し、キリスト教を弁護しただけでなく、国家主義教育が持つ問題点を、早い段階から指摘していました。熊本英学校で教えていた時期にも、同じような問題が起こります。

熊本英学校はキリスト教主義に基づき、西洋の学問を教える小さな学校でした。1892年新たな校長として蔵原^{くらはら}惟^{これ}郭^{ひろ}を迎えるにあたり、教員の奥村禎次郎が「本校はキリスト教に基づいた国際主義と普遍的博愛を教える学校である」と演説しました。今の私たちからすると、「国際主義」「普遍的博愛」を掲げることが何の問題になるのか、と思うかもしれませんが。しかし当時、それは「天皇や日本を否定するのか」と、国家主義の立場から激しく攻撃されました。その結果、熊本県知事は学校に介入し、「その演説を行った教員を罷免せよ」と圧力をかけてきました。国家権力が、私学の教育内容にまで直接干渉してきたわけです。

柏木は、こうした出来事を通して、国家主義が人間の良心の自由、信仰の自由、教育の自立性を脅かす現実を、身をもって体験しました。彼はこれに対して抵抗しましたが、最終的には熊本英学校を離れ、安中教会の仮牧師として働くようになり、のちに正式な牧師となりました。

『上毛教界月報』と反戦・民主主義

安中教会に赴任した柏木が取り組んだ重要な仕事の一つが、『上毛教界月報』という

月刊誌の刊行です。もちろん協力者もいましたが、編集、原稿依頼、執筆などの中心を、柏木がほぼ一人で担っていました。この雑誌の中で彼は、今から 120~130 年以上前に、「戦争はあってはならない」とする非戦思想や民主主義の必要性を力強く主張し、大日本帝国における天皇制・国家主義とそれに迎合する宗教の問題点を公然と批判しました。

当然ながら、国家権力にとって、国の方針や軍事政策を批判する雑誌は、歓迎されるものではありません。しばしば警戒され、記事削除の圧力を受けることもあり、ときには発禁処分になる号もありました。警察からも「要注意人物」としてマークされることになります。そうした圧力に屈せず、柏木は安中教会の牧会を続け、1935 年 6 月に高齢のため安中教会を辞任します。翌年には『上毛教界月報』も廃刊を余儀なくされました。

その後の日本は満州国の建設、日中戦争の全面化という戦時体制へと進んでいきます。柏木義円の思想と活動は、まさにその時代の流れに逆らうものでした。

安中教会と新島記念会堂

日本キリスト教団安中教会は、今も活発に伝道を続けており、そこには新島襄記念会堂という礼拝堂があります。新島襄記念会堂は、新島襄の召天 30 周年を記念して 1919 年に完成した建物です。大谷石という特殊な石材を用いた、美しい礼拝堂です。中に入ると、珍しいものを見ることができます。大学の講堂などには歴代総長などの肖像画が掲げられていることがありますが、教会の礼拝堂で人物の肖像が並んでいるのは、あまり一般的ではありません。ところが安中教会には、新島襄、安中教会創立メンバーであり、群馬県や同志社に大きく貢献した湯浅治郎、柏木義円、デイヴィス宣教師の肖像が掲げられています。

柏木は海老名弾正から洗礼を受けたものの、のちには思想や目指す方向性の違いから、対立もありました。その二人が礼拝堂の中で向かい合うように掲げられているのは、歴史を覚える、それからその中の多様性と葛藤も記憶するように思われました。

なぜ柏木義円を「真の同志社人」と言えるのか

では、なぜわたしが柏木義円を「真の同志社人」と考えるに至ったのか、その理由について説明します。一点目、彼は「非戦・平和主義」を公に主張した人物でした。現代の日本では、「どこかの国と戦争をして景気を回復させよう」と公然と言う政治家がいれば、多くの人が「危険だ」と感じるでしょう。しかし、明治から昭和前期にかけての日本は、常に戦争をする国でした。

大日本帝国憲法が発布されて間もない 1894 年には日清戦争が起こります。建前として

は朝鮮を清国から独立させるとしていましたが、実際には朝鮮を日本の勢力下に置き、植民地化していく過程の一部でした。その後、ロシア帝国との覇権をめぐる日露戦争、第一次世界大戦、満州事変、日中戦争、太平洋戦争へと、戦争が連続する時代が続きます。

当初、柏木も日清戦争については、世間一般の「正義の戦争」という見方に同調していました。日本が新しい文明国として、旧来の中国を打ち破ることは「文明史の中で正しい」とされており、柏木も一度はそう考えたのです。しかし、戦争の結果を見て、朝鮮の真の独立につながらなかったことが分かり、また戦争のなかで最も犠牲を強いられるのが一般民衆であることを痛感し、戦争そのものに対する疑問を深く抱くようになります。

さらに、トルストイなどの影響、そしてキリスト教の信仰に基づき、最終的には「戦争はどのような名目であれ許されない」とする非戦論に至りました。戦争は間違っていると心の中で思うことは、多くの人にできるかもしれません。しかし、それを公に、説得力のある論拠を示しながら主張することは、戦時下において非常に困難であり、大きな勇気を必要とします。

1936年、彼の人生も終わりに近づいていた頃、柏木は次のように書いています。

二十世紀は前の十九世紀中未だ嘗て無かりし人類互ひの大相殺を為し、世界開闢以来亦未だ嘗て見ざるの巨費を之が為めに浪費し、而して尚ほ之にも懲りず由来反って益々国力を此戦闘機関に集中せんと致居候。而して宗教も、倫理も、学問も、教育も、概ね皆其の提灯持にて候（『上毛教界月報』455号、1936.9.20）

ここで言う「^{ちようちんもち}提灯持」とは、権力者の周りで、都合の良いことを言って持ち上げる存在、という意味です。戦争に協力する宗教、教育、倫理、学問に対する批判でした。柏木は、戦争は「犯罪」と断定します。しかもこれは、満州事変、日中戦争へと続く「戦時体制」の中で語られた言葉です。

さらに彼は、日本の「特殊な国体」思想と教育勅語の問題性をも厳しく批判しました。

「日本ハ特殊ノ国体ナリ、随テ特殊ノ倫理アリト云フハ日本ヲシテ世界ニ忌マレ、孤立セシムル処ニアラザルカ。国民ヲ皇室ノ犠牲ト為シ、国民ヲシテ皇室ト情死セシムル所以ニアラザルカ、教育勅語ト共ニ日本ノ存亡ニ関スル大問題也」（1912年4月15日日記、飯沼二郎、片野真佐子編『柏木義円日記』118頁 行路社 1998年）

このように柏木が、平和のために大きく働いたのが、真の同志社人であるとわたしが考える

一つの理由です。そして、一人の人間を大切にする彼の人間観がその根幹であることが二つ目の理由です。

目的としての人間 ― キリスト教的人間観

なぜ、柏木はここまで国家主義や戦争を批判したのか。その根底には、「目的としての人間」という柏木の人間観があります。これが二点目です。彼はよく、アメリカの神学者チャニングの「人てふ名は帝王と云ふよりも大統領と云ふよりも更に尊貴なる名号なり」という言葉を引用しました。また、スコットランドの哲学者ウィリアム・ハミルトンの議論を引用しながら、人間には 何かの「手段」としての人間観、それ自体が「目的」である人間観があると述べ、「一人の人間とその命は、他の何かのための単なる手段にされてはならない」と繰り返し主張しました。

天皇であれ、王であれ、大統領であれ、「人間」である以上、その尊厳はすべて等しい。人間という名こそが、最も尊い名であると。この「目的としての人間観」の根拠は、キリスト教の人間理解にあります。聖書は、人間を「神のかたち」に造られた存在として描きます。人間の霊性は神の肖像であり、これ以上に尊いものはない。そして、神を愛し、隣人を愛することが、神との正しい関係の中心に置かれています。

しかし、「神を愛する」とは何か。柏木は、「神の愛の具体的な実践が、隣人を愛することだ」と理解しました。愛らしい人、尊敬できる人を愛することは、それほど難しくありません。誰でもある程度はできます。しかし、キリスト教的な隣人愛とは、むしろ弱い人々、困難の中にある人々、自分と異なる人々、愛らしく見えない人々を大切にすることです。柏木義円の思想と行動の特徴は、こうした人びとの側に立とうとする姿勢にありました。

人間を「目的そのもの」として尊ぶこと、一人ひとりの人格の尊厳を守ること、そのために、国家や社会のあり方を批判的に問うこと、これらは、彼のキリスト教的人間観から自然に導かれたものです。

「弱さ」の側に立つということ

三点目、わたしが柏木を「真の同志社人」として考えるもう一つの理由は、柏木義円が「弱さの上に立っていた」ということです。彼はどのように「弱さ」の側に立ち続けたのでしょうか。

彼が愛読した聖書に次の言葉があります。

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです

(『新約聖書』「コリントの信徒への手紙二」12章 9～10節)。

柏木は、この言葉に深く励まされ、また自らの立場を重ね合わせていました。柏木義円研究の第一人者である片野先生は、柏木のことを次のようにまとめています。

「柏木は、強者を中心に置いて富国強兵を国是とする 20 世紀日本の国家に対し、排除された細民の側に立って異議を唱え、反骨の精神をもって地域に生きる田舎牧師として老若男女に寄りそう生き方を選んだ。」(片野真佐子、『柏木義円：徹底して弱さの上に立つ』ミネルヴァ書房、2023 年、iv)

キリスト教の本質は、強さではなく「弱さ」の中に現れます。神が人となったという「受肉」の教理は、全能の神が、あえて弱い人間になり、その命を十字架の上で失うという出来事です。これは「弱さの極み」です。だからこそ、キリスト教の本質は、弱い人間の側、抑圧される人びとの側にあると言えます。

柏木義円も、新島襄も、決して「強者」の側に立つ人ではありませんでした。柏木は徹底して「弱さ」の側に立ち続けました。彼の生涯を詳しく見てみると、国際関係においては、日本に対して弱い立場にあった朝鮮半島の人びとの側に立ち、政治的には、天皇制・国家主義に対して、一人ひとりの個人の良心の側に立ち、経済的・思想的には、資本主義に対して、当時は軽視されていた社会主義の可能性にも目を向け、地域的には、東京中心の社会に対して、地方の人びとの側に立ち、性別の問題では、男性中心の社会に対して、女性の権利と尊厳を擁護しました。

わたしたちが望む「真の平和」とは、結局、普通の人びと、そして弱い人びとの平和でなければならない、柏木はそう考えました。

結び — 同志社で学ぶことの意味

最後にまとめとして、同志社で学ぶことの意味について一言付け加えたいと思います。今、わたしが柏木義円の生涯から汲み取って皆さんに伝えたい、「基督教主義を以て徳育の基

本と為せり」という建学の精神の現代的意味は、こうです。同志社で学ぶということは、「勝ち組」になることや良い就職をすることだけを目標にするものではありません。社会の中で弱い立場に置かれた人びとの味方になる力を養うことであります。そして、もう一つ大切なのは、「わたしたち自身もそれぞれ弱さを抱えている存在だ」という事実を認め合うことです。

自分の弱さを認め、互いの弱さを認め合うことを通して、はじめて本当の意味での平和、自分にとっても、社会にとっても「まことの平和」を求めていくことができるのではないのでしょうか。それこそ同志社で学んだことの意味であると、わたしは考えています。

以上で、キリスト教文化センターからの Doshisha Spirit Week 講演会「真の同志社人―150 年の歴史の中で―」を終えたいと思います。どうか皆さんが、同志社で学ぶ意味を、創立 150 周年という節目の年にあらためて深く考え、それぞれの人生の中で生かしていくための一つの参考になれば幸いです。長時間のご視聴、ご清聴をありがとうございました。